

コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2021年8月19日

1. 新型コロナ感染妊娠女性の死亡率は15倍: 米国大学病院症例
2. 妊娠中の新型コロナワクチン接種の安全性

【松崎雑感】

今日は妊娠関連の情報提供です。

妊産婦の死亡率は10万人あたり3人です。この数字を基本として判断してください。

1. 新型コロナに感染した妊産婦さんは感染しない場合と比べて死亡リスクが10倍以上となります。
2. それでは、ワクチンを受けた方が良いのかどうか、ワクチンの安全性はどうなのかという疑問に答える一つのデータを紹介します。新型コロナワクチンを受けた1300名以上の妊婦さんと非接種の妊婦さんを比べたところ、死産、胎児異常などが増えることはないことが確認されました。ワクチン接種の長期的影響は今後の調査が必要ですが、新型コロナに感染した場合の死亡リスクの大きさは、ワクチン接種のリスクを大きく上回ると考えます。したがって、妊娠中あるいは妊娠予定の方々には、ワクチンの優先接種が必要と考えます。

新型コロナウイルス感染妊娠女性の死亡率は15倍：米国大学病院症例

Chinn J (University of California, Irvine Medical Center, Orange.), Sedighim S, Kirby KA, Hohmann S, Hameed AB, Jolley J, Nguyen NT. **Characteristics and Outcomes of Women With COVID-19 Giving Birth at US Academic Centers During the COVID-19 Pandemic.** **JAMA Netw Open.** 2021 Aug 2;4(8):e2120456. doi: 10.1001/jamanetworkopen.2021.20456. PMID: 34379123; PMCID: PMC8358731

背景

これまで新型コロナウイルス感染妊婦では、帝王切開率と早産率が高く、妊婦自身の重症化率と死亡率も高いことが報告されている。観察期間を延長したデータが必要である。

目的

大規模な妊婦コホートにおける新型コロナウイルス感染の有無別の妊娠出産の予後と関連する因子を検討する。

方法

2020年3月1日から2021年2月28日の間に出産を行った18歳以上の妊婦の、新型コロナウイルス感染の有無別の臨床的特徴と予後を比較した。全米の499の大学病院とその関連施設の症例を対象とした。主要調査項目は入院中死亡率、入院日数、ICU治療、人工呼吸器治療、生命予後など。

結果

妊婦869,079名中、18,715名(2.2%)が新型コロナに感染した。18~30才年齢層の比率はコロナ群61.7%、非コロナ群52.5%。白人比率はコロナ群43.1%、非コロナ群58.7%。帝王切開率は両群に差なし(32.5%対32.3%)。

早産はコロナ群で有意に多かった(16.4%対11.5%)。

ICU治療はコロナ群で有意に多かった(オッズ比OR 5.84、5.2%対0.9%)。

挿管人工呼吸治療もコロナ群で有意に多かった(OR 14.33、1.5%対0.1%)。

入院中死亡もコロナ群で有意に多かった(OR 15.38、0.1%対<0.01%)。

結論

このコホート調査では、新型コロナに感染した出産妊婦の死亡率、人工呼吸治療率、ICU治療率、早産率は、非コロナ群より有意に高かった。

妊娠中新型コロナに感染すると死亡リスクが15倍

予後	新型コロナウイルス感染		オッズ比
	あり	なし	
早産	16.4%	11.5%	...
ICU治療	5.2%	0.9%	5.84
人工呼吸治療	1.5%	0.1%	14.33
入院中死亡	0.1%	<0.01%	15.38

妊娠中の新型コロナワクチン接種の安全性

Blakeway H (Fetal Medicine Unit, St George's Hospital, St George's University of London), et al. **COVID-19 Vaccination During Pregnancy: Coverage and Safety.** **Am J Obstet Gynecol.** 2021 Aug 10;S0002-9378(21)00873-5. doi: 10.1016/j.ajog.2021.08.007. Epub ahead of print. PMID: 34389291.

背景

ワクチン躊躇に加えて、外出制限の解除後、市中感染増加による妊婦への感染増加が懸念されている。イギリスではすべての妊婦への新型コロナワクチン接種が可能となっているが、安全性に関するデータは少ない。

目的

2021年3月1日から7月4日までにロンドン、セントジョージ大学病院で出産した妊婦を対象としたコホート調査。新型コロナワクチン接種率とそれに関連する要因の調査。周産期のワクチン接種安全性評価。調査項目は、ワクチン接種歴、ワクチン銘柄、接種時妊娠週数、年齢、出産回数、エスニシティ、基礎疾患、社会経済状態、死産（24週以降の胎児死亡）、早産、先天奇形、出産後合併症頻度など。

結果

1328名の妊婦中141名が出産前に1回以上ワクチン接種を受けた。

ワクチン接種時期は第三期が14.2%。90.8%がmRNAワクチン、9.2%がウイルスベクターワクチン。

若い人々あるいは社会経済状態の最下層の人々で接種率が有意に低かった(最下層のワクチン接種オッズ比0.09)。

白人と比較してアフリカ中米系、アジア系の人々の接種率が低かった。糖尿病合併妊婦で有意に接種率が高かった(オッズ比11.1)。

1回以上ワクチン接種群と未接種群の間で、死産(接種群0.0%対未接種群0.3%)、胎児異常(2.2%対2.7%)、帝王切開率(30.8%対30.6%)、低体重出生(12.0%対15.8%)、ICU治療率(6.0%対3.5%)、新生児ICU治療率(5.3%対5.4%)などの妊娠帰結に差は見られなかった。

ワクチン接種群で40週未満の出産増加は見られなかった(ハザード比0.93)。

結論

新型コロナワクチン接種可能な妊婦のうち実際に接種した者は3分の1以下だった。

ワクチン接種群と未接種群の間に妊娠帰結の違いは見られなかった。

若年、非白人エスニシティ、社会経済状態低層ほどワクチン接種率が低かった。

妊娠中の新型コロナワクチン接種で、妊娠経過、出生児に悪影響が見られないという証拠が新たに付け加えられた。

適切な情報提供を行って、ワクチン接種の勧奨とワクチン躊躇の低減を目指すことが重要である。

今後妊娠初期のワクチン接種の安全性、出生時の長期的観察データを積み上げて、ワクチン接種の安全性をさらに確認する必要がある。

新型コロナウイルスワクチン接種の有無別妊娠帰結

妊娠帰結	新型コロナウイルスワクチン	
	接種群	非接種群
死産	0.0%	0.3%
胎児異常	2.2%	2.7%
帝王切開	30.8%	30.6%
ICU治療	6.0%	3.5%
出産後出血	9.8%	9.5%
新生児ICU治療	5.3%	5.4%

(いずれも有意差なし)